

Title	殉教者・朱基徹における「死生観」
Author(s)	高, 萬松
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume28, 2013.3 : 204-219
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4461
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

殉教者・朱基徹における「死生観」

高 萬 松

はじめに

朱基徹（ジュ・ギチョル、一八九七—一九四四・四・二二）牧師は日本帝国主義が神社参拝を韓国教会に強要した時代、それを拒否し続け、遂に「殉教」した韓国人牧師である。一九四四年の殉教から六八年が過ぎたが、彼の伝記、そして神学と信仰の関連論文、記念講演などが多くある。^① それらは主に神社参拝問題を中心にする傾向が強いが、本稿では彼が「生」と「死」と「苦難」とにどのように向き合ったのかに重点を置いて考察したい。

彼は神学者ではなかったので著作がなく、また説教集などもない。しかし、彼の説教を聞いていた人々が記憶をもとにまとめたもの、また当時の雑誌に掲載されていた説教を合わせると約二五篇になる。^② 一部は他人の手によるものであるという制約もあるが、彼の根本的な思想からは大きく離れていないと思われるので、本稿ではこのような説教を資料として用いる。

殉教者の信仰と行為は偉大であるため、後代の人々がそれを称賛するあまり、神に帰すべき栄光が損なわれる危

陰性がある。本稿では、この点を意識しつつ、神が朱基徹に何をなさったかに焦点を当てたいと思う。

一 朱基徹における「生」の理解

朱基徹がキリスト者の「生」をどのように理解していたのかについて考察する。彼の実際の生涯を踏まえた上で、彼の説教を取り上げる。

1 生涯

朱基徹の生涯は次の三つに分けられる。第一時代が牧師への召命を受ける以前、第二が平壤長老会神学校の卒業後の牧会時代、そして第三が神社参拝反対による収監時代となる。その三つの時代を一言でまとめると、苦難を通して生から死に至った牧師の生涯である。その第一時代は、彼が当時韓国で有名なキリスト者の民族運動家、教育家たちから影響を受け、キリスト者としての人格が形成された時代である。大学一年の時に持病の目の病気によって学業を止めて、それから四年間の挫折期間があったが、むしろそれがきっかけとなって彼は人生の転換を経験する。リバイバル集会で回心し、彼は牧師となったのである。それは「神の摂理」と見てよいであろう。彼の第三の時代を収監の時代と言ったが、彼の生涯における苦難の時代であった。すなわち、一九三八年二月に平壤の警察署に最初に拘束されて以来、七年間に四回にわたって拘束され、そして最後の一九四〇年九月に平壤警察署に拘束されて一九四四年四月二一日の殉教の時まで、彼は苦難の道を歩まなければならなかった。厳しい拷問を受けたのである。

2 時代的狀況

ここでは朱基徹自身の言葉から一九三〇年代に絞って三点挙げよう。第一に当時の韓国の長老派教会の実態である。神社参拝反対を巡って日本のキリスト者の一部は、韓国教会全体が一塊となつて反対運動を続け殉教者が出たと捉える傾向が見られる。そうではなく、一九三八年頃になると韓国教会も日本帝国主義に屈服して神社参拝を可決した。牧師たちも三つのグループに分かれていた。すなわち、朝鮮総督府と結びついて妥協するグループ、牧会を止めて逃げるグループ、そして抵抗するグループであった。朱基徹はその第三番目のグループに属して、生きるか死ぬかという切迫した時代に生きていたのである。当時は日中戦争も勃発した頃であつたので、朱基徹はそのような時代を見て、主の再臨も近づいているのではないかと見ていた。当時の社会風潮は若い人々が共産主義に魅力を持つて教会から離れていく雰囲気であつた。こういうことから彼は伝道の必要性を力強く語つていた。このような三つの事柄も、結局のところ、教会が生きるか死ぬか、あるいは、人間の魂が救われるかどうかという生死の問題と関わっていることを否定できない。

3 牧師としての生

朱基徹が殉教者となつたのは彼が牧師であつた理由が最も大きい。というのは、彼が当時最も影響力のある教会で牧会していたからである。ここでは牧師としての彼の「生」に焦点を当てる。韓国プロテスタントの歴史の中で彼は第二世代キリスト者であつた。人生の進路に迷つた面も見られるが、一九二〇年（二三歳）にリバイバル集会に参加し「回心」を体験し、そのきっかけで平壤長老会神学校を卒業し、牧師となつた。

当時のキリスト教新聞『基督新報』（一九三六年五月一三日付）には朱基徹の「牧師職の栄光」という説教が掲

載されている。これは朝鮮イエス教長老会所属の牧師修養会に講師として招かれ説教したもので、「神からの選び」と「神の栄光」という言葉がキーワードとなっている。神がご自分の栄光のために牧師を選び、牧師は神の恩寵に仕えるという信仰が据えられている。ここでは本稿と関連ある箇所だけ取り上げよう。

牧師修養会での説教の性格上、これは牧師たちに使命感を自覚させる意図が強い。その使命感は、何よりも神に選ばれたと自覚する人が抱くものである。朱基徹はそのために聖書の人物を例として挙げ、「原則的に牧師は神が選び」、神が立たせると言っている。⁽³⁾ 朱基徹自身も体験的にそれを証言している。

また牧師は「神の栄光のために生きる者」と彼は定義している。⁽⁴⁾ 「生きるにも死ぬにも、わたしの身によつてキリストがあがめられることである」(ピリピ 一・二〇、口語訳、以下同様) という聖書箇所が引用されており、この言葉が牧師の生活の中心思想を表していると見ている。彼によれば、当時の一般社会には牧師は民族主義者、社会事業家だという誤解もあつたが、彼は牧師が「専ら神の栄光と、その名と神の国のために生きる神の使者」であると力説している。⁽⁵⁾

4 神の前での「生」

神の前での生という生き方は朱基徹の生を貫いている。彼の言う神は、創造主で、人間の生と死の支配者であり、同時に全能の神である。一九三七年の「神の前での生活」と題する説教の冒頭で「私たちがどこに行つて何をして、神様は私たちのすべてを見ておられる。私たちはこの事実を意識しなければなりません」と述べている。⁽⁶⁾ 彼はこのような神認識の下でキリスト者の生の在り方を示している。

生の在り方とは「敬虔な生活」、「正直な生活」、そして「神に認められる生活」をするということに集約できる

が、ここでは最後の点に絞りたい。彼によれば当時の風潮では、神の御心に従うことより、むしろ人間を意識する傾向があった。そのような行動様式の結末は神の名を汚すことに至る。それを警戒しつつ、彼は「この世界がすべて汚れても主イエスのみは聖であるため、私たちは専ら彼に従い、彼の命令に従ってこの汚れている世界を清めなければならぬ」と締めくくっている。⁷彼はそれ以降も、神の前での生の態度を堅持したに違いない。

5 朱基徹の弱さ

強者が殉教するのではなく、弱さのある人間が殉教の使命を果たしたということに神の御心がある。使徒パウロも「わたしは、なんとというみじめな人間なのだろう。だが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」(ローマ 七・二四)と祈ったように、類似の祈りが朱基徹にもある。

彼の「謙遜のために」(一九三九年二月)という祈禱文は自己絶望からの叫びのようである。朱基徹はそこにおいて主イエスの謙遜に言及した後、自己絶望に陥って、次のように述べている。すなわち、「しかし、私の内には常に『わたし』というものが残っています。あなたが座るべき場所にこの奴「身」が座っています。それゆえにあなたが受けるべき栄光と賛美とをこの奴「身」が受けようとする時がしばしばあります」⁸と。これが書かれたのは朝鮮イエス教長老会の総会が神社参拝を決議し、彼も警察当局に拘束され、しばらくの間釈放された頃だと思われる。教会の置かれていた切迫した状況下で直面させられた妥協と抵抗の間の内的葛藤が窺える。その中で彼の次のような祈りは彼の謙遜さを十分に表しているであろう。

ああ、主よ！ 私は義を求めています。あなたの完全さを求めようと心が燃えてはいません。自分の罪惡を

深刻に受け止め、そのために悔い改めようとしません。また自分の弱さを認めず、向上しようとしてもいません。これは確かに私の志が弱い証拠です。これが私の傲慢です。^⑨

このように自分の弱さを感じている彼の姿に、彼の強さが隠れていると言えよう。

二 キリスト者の地上の生の終わり

キリスト者の地上生活の終わりは二つある。一つが肉体の「死」であるが、もう一つはキリストの再臨による。彼の説教においてもこのような聖書の理解が見られる。

1 「一死覚悟」

「一死覚悟」と題する説教は「死」に対して積極的な態度が見られる。それは一九三三年一月、平壤長老会神学校で開かれた「査経会（聖書勉強会）」での説教である。これが神学生の前でのものなので、彼の死（殉教）の予言のようなものである。

この説教は、「イエスに従って一死覚悟」、「他人のために一死覚悟」、そして「復活の真理のために一死覚悟」という三つの部分で構成されている。最初の「イエスに従って一死覚悟」という段落ではイエスに従おうとする者の「死」に対する基本的な姿勢について言及している。すなわち、主イエスに従う道は自分の命を惜しむ者には似合わない、^⑩「イエスを捨てて生きることとは死ぬことであり、イエスに従って死ぬことが実に生きることである」と見て

いる。^⑩第二の「他人のために一死覚悟」という段落では、神学生の前に主イエスの地上の生の在り方を提示し、イエスの模範に従うべきことを力説している。すなわち、イエスの誕生から十字架の死に至るまで、主イエスの地上の生が他人のためのものだということが、その生の頂点に十字架の死がある。その死が罪人のためのものであったので、キリスト者の行為も他人のためのものでなければならぬと言っている。^⑪第三は「復活の真理のために一死覚悟」という段落である。朱基徹は、キリストの福音が当時に至るまで伝えられてきた根本的要素が復活の福音であると見て、次のように伝道者たちに復活の証人の生を促している。彼は言う。「復活の福音が我々に至るまで殉教の血によって伝えられている。……諸君が読んでいる聖書は血の記録！血の伝達である。神学を語ることと諸君の使命が全うされるのであろうか。血によって伝えられてきた復活の福音のためにトマスはインドで命を散らした。ああ！今日の我々にも復活の福音のために一死覚悟」。^⑫

2 地上の生の終わりとしての「死」

朱基徹にとつて「死」は身近な事柄であつた。彼は結婚して間もないうちから身内の死を数回経験した。二〇歳（一九一七年）で結婚したが、三二歳（一九二八年）の時に三男が三歳六カ月で、三五歳（一九三二年）の時には長女が二歳で病死した。三六歳（一九三三年）の時には最愛の夫人が亡くなり、その翌年（一九三四年）には彼の父も亡くなった。このように彼は一六年間に家族四人の死を経験したのである。

彼は二九歳（一九二五年）から牧会に与かっていたが、それも当時は五〇〇人から一〇〇〇人規模の教会であつたので、数多くの信徒の死も経験したに違いない。一九三四年に彼の「死の準備」と題する説教は、牧会上での信徒の「死」に出会つた経験の産物である。以下にその説教を中心に考察しよう。

この説教は一般信徒を対象にしたものであったので、受け身としての「死」が描かれている。いつか死ぬ存在なので準備が必要だという認識である。その冒頭で、「わたしたちの住んでいる地上の幕屋がこわれると、神からいただく建物、すなわち天にある、人の手によらない永遠の家が備えてあることを、わたしたちは知っている」(Ⅱコリント 五・一)という言葉はその説教が何を目指すかを示している。死を通しての肉体的生の終わりは、神に帰るといことなので、その準備は永遠の命の準備になる¹³。

この説教から朱基徹の「死」の理解の一面面に触れることができる。第一点は死が神の審きと結びついていることである。人間は神の審きの前に立つ存在である。彼は、「神の」確かなる審判台の前で「私たちは」弁明もできず、偽ることもできず、すべての行いに対して審きを受けますので、そのために備えが必要です¹⁴と云う。第二点は天国と地獄を鮮明に表していることである。当時の韓国教会の福音理解の一面面であるが、「一回に永遠の刑罰を受けるところに行きますと永遠に苦しみを受け、永遠の祝福を受けるところに行きますと永遠の命を受けます」ので、生きている間に神を畏れる生活をしましょうという趣旨である¹⁵。第三点は死ぬ日が分からないということである。このような死の特性があるので、彼にとつては「今日という日」が意味のある日であった。すなわち「ただ今日が私たちの所有であり、今が悔い改めの日であり、明日は神の所有である。私が所有しているのは現在のみであり、過去でもなく、未来でもない」¹⁶。このような信仰の姿勢は彼の収監中、拷問などを受けている時にも変わっていない。朱基徹は監獄生活の中にも一日・一瞬間を神に委ねていると言っているのである¹⁷。中間時に生きているキリスト者の生であったのである。

3 「主の再臨」

上記の二つは人間の死によるこの地上の生の終わりであるが、朱基徹は「主の再臨」によるキリスト者の地上の生の終わりについても語ることを恐れなかった。その理由は当時の時代的背景があつたと考えられる。前述のように、世界では戦争の噂があり、朝鮮半島においてもキリスト教の信仰生活に様々な制約を意識している時代状況があつて、聖書の通りに主の再臨が近づいているのではないかという思いが背後に見られる。

「主の再臨」と題する一九三七年一〇月の説教には以下のような終末論的な内容がある。この説教も聖書の教え、つまり、ヨハネの黙示録にある「新しい天と新しい地」、そして「最後の審判」の事柄から離れてはいない。「この新しい天と新しい地の栄光に関して黙示録二一章に記されています。私たちはこの新しい天と新しい地を仰ぎ歩むべきです。この栄光のあるところが私たちの最後の目的です」と言っている。⁽¹⁸⁾

三 生と死の挟間にある苦難

朱基徹の死（殉教）は長期間の苦難の末、成し遂げられたものである。妥協してその苦難から免れることもできず、彼自らその苦難の道を歩んだ。ここでの「苦難」はあらゆる拷問を伴った想像を超える迫害が加えられたものなので、独特な意味があるということを前提しよう。

1 「十字架の道」としての「苦難」

苦難を巡る朱基徹の理解は「十字架の道」（一九三七年一〇月）と題する説教によく表れている。それは朝鮮イ

エス教長老会の総会における説教であつたので、聴衆は皆、牧師であつた。この時期は日本帝国主義が韓国教会に神社参拝を徐々に強要した時期で、各々の教会もどうすれば良いか分からない時期であつた。この意味でそれは韓国教会に送つたメッセージである。朱基徹にとつて神社参拝反対は真理の道であつたため、どのような迫害があつてもそれを守らなければならなかつた。彼はその反対の隊列の最先頭に立つていたのである。

彼が「主に従おうとする我が総会〔日本では大会〕¹⁹⁾は、行きたくなくても、この十字架の道を歩まなければなりません」と言つたのは韓国教会に向けた言葉であつた。それと同時に彼は総会に参加した牧師たちに「愛する総会の会員の皆様は自己を克服し、かつ、各々は自分の十字架を背負つて、命の道となる主イエスに従ひましょう」と勸めている。²⁰⁾しかし十字架の道は主イエスの教えのように狭い道であるため、その道を選んだ人は少なかつた。韓国の長老派教会の総会が神社参拝を可決したからである。それは韓国教会史の汚点であつた。それほど苦難の道を歩もうとする人は少なかつたのである。

2 生と死に挟まれた「苦難」

朱基徹の「苦難」は現代の私たちの想像を超えるものと言つてよい。それは時間的にも四回の拘束によつて長期間にわたるもので、その苦難の内容も日本帝国主義からのキリスト教への迫害が中心となつていたので独特なものであつた。

「私の五つの祈り」という説教は七ヶ月間の収監期間中、朱基徹が神に常に捧げた祈りである。殉教する前に一時釈放された際に、自分の牧会した教会での最後の説教として語つたもので、遺言のようなものである。当時の独特な状況の下での「苦難」は彼にとつて「死」よりも深刻なものであつたので、上記の説教を考察しよう。

それはローマ人への手紙第八章一八節と三九節を聖書箇所にして、「死の力」と「長期間の苦難」に打ち勝つように、そして、「母と家族を主に委ね」、「義のために生き、義のために死ぬように」、最後は「私の魂を主に委ねます」という五つの祈りで構成されている。神社参拝を反対した理由で彼を免職し（一九三九年十二月）、彼の牧会した山亭岬教会をも閉鎖させた（一九四〇年三月）、当時の教会の雰囲気と上記の祈りを考えると、彼が二重、三重の「苦難」に直面していたことが窺える。

その苦難は日本の警察が神社参拝を強要するための手段として用いた様々な拷問による肉体的苦痛だけではない。それに精神的孤独感、死の恐れ、当局の誘惑、家族への心配などが含まれている。肉体的苦痛は、拷問の現場を見た彼の息子によれば、それは「人間として到底耐えることのできない苦痛」であつた。精神的孤独感とは志を一つにしていた人々の背叛による孤独感である。朱基徹が一時釈放された際に、「七ヶ月間、義城〔慶尚北道の地方〕で受けた肉体的苦痛はそれなりに耐えることができましたが、精神的な孤独感⁽²⁾は本当に耐えることができませんでした。七十数名の同志が一日のうちに全部捕らえられて来ましたが、……「ほとんどが屈服して」残り四人が最後まで抵抗しました。その時に感じていた精神的な孤独感、寂しさは、本当に、本当に耐えることができませんでした」と言う⁽²⁾。また彼は死の恐れと戦わなければならなかった。常に死に直面している切迫した状況において、「命ある万物がすべて死の前で呻き、息を吸っている人がすべて死の前で慄いて悲しんでいます。しかし死を恐れて、義を捨ててこの死から免れるために、私の信仰を捨てないように、主よ、私を助けてください」と彼は祈らなければならなかった⁽²⁾。彼は死の力に打ち勝つことのできる神の力を求めたのである。

最も重要なことは長期間の苦難⁽²⁾だったということである。「もし一、二回くらい『だけ』受ける苦難であるならば耐えることができます。しかし、長期間の苦難は本当に耐えることができません。剣で切り殺すか、あるいは火

で焼く刑罰であるならば一、二回で終わってしまい、耐えられるかも知れません。しかしその苦難が一年、一〇年続くものであるならば、本当に耐えることができません²⁴⁾。このように朱基徹にとって苦難は死よりも苦しいものであった。

3 苦難を支える神

上記の説教を見ると苦難に置かれている人間の無力さが感じ取られる。殉教の志があるにもかかわらず、様々な誘惑がその志を妨げている。その中で人間ができることは祈りしかない。

「聖霊と祈り」（一九三七年三月）と題する説教によれば、獄中での上記の五つの祈りは聖霊の導きである。そこで朱基徹は聖霊の働きを次の三つに要約している。それらは、第一に、聖霊が信者に祈る心を与えということ、第二に、聖霊が正しい祈りを教えてくれるということ、第三に、キリスト者に神に「アッバ、父よ」と呼ぶ特権を与えるということである。「祈りは専ら聖霊が主導する」と述べられているように、そのような祈りの結果、彼は次のように苦難を支えている方が主イエスであると告白する。²⁵⁾すなわち、「私の王・イエスが私のために「十字架の」苦難を耐えましたので、私の受けている苦難はどれほどのものでもありません。したがって『初めは私たちが十字架を背負いますが、後には主ご自身が私たちの十字架を背負ってくださいます』²⁶⁾と告白しているのである。

結局、苦難とは人間に主導権があるのではなく、神の賜物であったのである。

4 苦難の結果としての殉教と神の選び

一九三八年を集中して見よう。神社参拝問題で朝鮮イエス教長老教会が切迫した状況に直面した頃の日韓両国の

牧師たちの動きは興味深い。というのは、彼らの動きが生と死と苦難と全く関係のない動きではないからである。まずここで一つ指摘したいことは、近年発行された日本のキリスト教雑誌『信徒の友』では朱基徹が次のように「日本人」と呼ばれているという点である。「一九四四年四月二十一日、ひとりの『日本人』牧師が妻と四人の息子を遺して、獄死しました」⁽²⁷⁾。このような歴史観は問題がある。

朱基徹は一九三八年に初めて神社参拝問題で警察当局に拘束された。それは彼の「死」と「苦難」の予告であった。我々には神のために死ぬということが、人に強いられてできることではないと思われる。そうではなく、それは神によって選ばれた者が担うものである。例えば富田満であるが、古屋安雄によれば、富田が日本基督教団の統理になったときに、宣教師たちは殉教を期待した。⁽²⁸⁾しかし富田は神社参拝が宗教ではないと平壤まで説得しに行った。皮肉なことに、その時の論争の相手が朱基徹であつたのである。ある意味では富田は朱基徹に死を施した人物である。

そして朴亨龍（パク・ヒョンノング）という朝鮮長老会の有力な牧師がいる。彼はプリンストン出身であつて、その関連もあると思われるが、富田が帰国する際に同行した人物である。彼を擁護する者は別の目的で日本に來たと言うが、神社参拝問題から逃げるためだつたと見る人もいる。⁽²⁹⁾その翌年、高倉徳太郎は「自死」に至つた。⁽³⁰⁾

上記の四人の牧師たちの行動を踏まえると、神のための死（殉教）は神に属する事柄である。すなわち、それは神によつて選ばれた人間が神の力に支えられて、ただ神の栄光のために用いられるということである。

むすび

「死」について朱基徹はそれが生の終わりではなく、永遠の命の始まりと理解している。当時韓国教会の神学が保守主義的であった以上、朱基徹の死生観はそのような福音理解から離れることはできず、彼の思考を貫いていたのは神の審きがあるということ、天国と地獄、そして永遠の祝福と永遠の刑罰があるという認識であった。彼は同時代の人々、とりわけ同時代の他の牧師たちと比べ、厳しい「苦難」の道を歩んだ一人である。その意味での彼における「苦難」の意味を本稿では捉えようとした。彼にとつて苦難の道とは彼の力によつて通ることでは決してなかった。どう祈つたらよいか分からない時に、「御霊みずから、言葉にあらわせない切なるうめきをもつて、わたしたちのためにとりなして下さる」（ローマ 八・二六）という言葉のように、朱基徹は聖霊のとりなしの祈りに支えられて、そのような十字架の道を歩んだと考えられる。したがって、彼自身ではなく「イエスご自身が私の十字架を背負ってくださる」と告白することができたのである。彼は一日・一瞬を神に委ね、イサクのような捧げものとなつて、神に栄光を捧げたと言えよう。

注

- (1) 以下は代表的なものである。In Soo Kim, *Ju Gi-Cheul : The Life of The Reverend Soyang Ju Gi-Cheul Lamb of Jesus*, Presbyterian College and Theological Seminary Press, 2008.

- (2) Cf. Sung-Kuh Chung, *Korean Church and Reformed Faith : Focusing on the Historical Study of Preaching in the Korean Church*, Time Printing, 1996, 88-113.
- (3) 『基督新報』(一九三六・五・一三)‘三頁’。
- (4) 同上。
- (5) 同上。
- (6) 金仁洙 『穌羊朱基徹』 洪盛社、二〇〇七年、三〇九頁 「김인수『소양주기철』홍성사」。
- (7) 同上書、三一四頁。
- (8) 同上書、三四七頁。引用文の「」内は筆者の補語。以下同様。
- (9) 同上。
- (10) In Soo Kim, *op.cit.*, 129.
- (11) *Ibid.*, 130.
- (12) *Ibid.*, 131.
- (13) 金仁洙、前掲書、二六三頁。
- (14) 同上書、二六五頁。
- (15) 同上。
- (16) 同上。
- (17) 金忠男 『殉教者朱基徹牧師の生涯』 ドリムブック、二〇〇七年、二二二頁 「김충남『순교자주기철목사의생애』드림북」。
- (18) 金仁洙、前掲書、三三四頁。
- (19) 同上書、三二七頁。
- (20) 同上書、三二八頁。
- (21) Kwangcho Ju, *More Than Conquerors*, Daesung Com, 2004, 75.
- (22) *Ibid.*, 44.

- (23) Ibid., 49.
- (24) Ibid., 50.
- (25) 金仁洙、前掲書、二八〇頁。
- (26) 同上書、一八九頁。
- (27) 『信徒の友』、日本キリスト教団出版局、二〇〇六年七月号、八二頁。
- (28) 古屋安雄『日本のキリスト教は本物か?』教文館、二〇一一年、五三頁。
- (29) 朴容圭『韓国基督教会史Ⅱ』生命の言葉社、二〇〇六年、七二三頁「박용규「한국기독교회사Ⅱ」생명의말씀사」。
- (30) 鵜沼裕子「高倉徳太郎の生と死をめぐって」、『聖学院大学総合研究所紀要』五〇号、聖学院大学総合研究所、二〇一〇年、一三七—一四〇頁。

（本論文は、二〇一二年十一月二十四日、女子聖学院中学校・高等学校で開催された第一八回日本臨床死生学会大会での発表に加筆・修正を施したものである。）